

夕暮れの窓辺。

どこまでも続く森の向こうに沈みゆく紅い夕日が美しい。

その森の中にこの館は佇んでいる。

最上階のベランダは広々として、植えられた薔薇のプランタが見事な紅い花を咲かせている。

ベランダの中心にはこの景色を眺めるのに相応しい、ガラス張りのテーブルに白い椅子。終わりゆく夏を過ごすのに、これ程相応しい場所はないだろう。

テーブルにはデキヤンタに移したワイン。ルビー色の紅さが夕日に映えている。

飲めば芳醇な薫りが鼻を擽り、舌にビロードのような滑らかな感触と喉を通る快感を齎す。

そして鼻腔に立ち上がる酒精と薫りが疲れた脳内を休め、恍惚の時を生み、また、感覚を鋭敏にしてくれる。

グラスは二つ。こんな銘酒は一人で飲むには相応しくない。

男と、女。

瞳を交わし、笑みを交わしながら、グラスを傾けては、唇を濡らす。

美しい情景。

しかし。

二人は同じ椅子に腰かけている。

男の笑みは愉悦であり、女のそれは喜色であった。

男は、実の所程々にしか酒を飲んでおらず、一方、女は酩酊し、とろんとした瞳をして、自失を深めていた。

そして。

男は全裸であり、その肉体の全てを堂々と晒し尽くしている。

女も身を包む衣服は全て脱ぎ捨て、下着も既に身に着けてはおらず、低めの身長ながら、美しく実った裸身の全てを男の眼に晒している。

身に着けている物で残っている物と言えば、トレードマークともいえるポニーテールを纏める金細工の髪留めのみ。あとは、この屋敷で男に着けさせられた、紅い宝石が嵌ったチョーカーと、左腿にだけ着けさせられている、むっちりとした太腿を強調する赤いガーターリングだけだ。

護身用の剣も、身に着けていなければいけないはずの腕輪も、とうに部屋の外へ、脱いだ衣服や下着と一緒に無造作に放り捨てられている。

そうして全裸の女は、椅子に座っている男の上に跨り、雄の逸物に己を貫かせたまま、酒色と肉欲に耽溺しているのだ。

「はあっ、はあっあ、む…んっ、んっ、んっ…ふはあっ…あ…はあっ…あ、はあっ…あ、んんっ…」

女。夕日に照らされた、輝くような裸身と、光を帯びたような髪が美しい。

勇者であり、王女であり、乙女であった。今、その面影を総て投げうったように、彼女は男の思うままに、はしたなく乱れ、蕩けた声を上げている。

キャロン王女。彼女は男の催眠術に為す術なく囚われ、今や自分の名前以外の記憶が曖昧になってしまっていた。

最初に出会ってから、幾度となくこの館を訪れては術の陥穽に落ち、幾度となく身体を弄ばれ、幾度となく精を注がれて絶頂に果てた。

そして今、彼女は男の術に身も心も完全に委ね、男の事を愛するように認識させられていた。

「ああっ…はあ、はあ、はう、んうんっ…んっ、んんっ…む…あ、ああ…ああ…あくうんんっ！はあっ、はあっ、あう、うくうんっ！」

女は再びワインを呷る。普段は僅かしか嗜まない葡萄酒を飲んでいるのは催眠のせいであり、その葡萄酒に混入された物の為であった。

ワインには女を惑わせる媚薬が入られている。しかも、とびきりの物である。後の世にラモー・ルーの血と呼ばれる、女を狂わせる媚薬である。

それは、ディメルンの森に生える赤い果実の汁である。その果汁は無臭透明で僅かに甘く、女が好む味をしているが、強力な強精作用と催淫作用を持ち、飲み物に混ぜられれば気づく者はいない。

その果汁が混入した飲み物を、女が一口飲めば身体が熱を持ち、二口飲めば強烈な性欲を煽る。三口も飲めば堪え切れなくなって下着を濡らし、処女であろうと自ら身体を開いてしまうのだ。

そんな強力な媚薬入りの酒杯を、キャロンは疑う事すらなく飲み続けている。媚薬の強い薬効が、次第に身体を、心を淫蕩に溶かし、少女の瞳を曇らせてゆく。

杯を傾け、瞼を閉じ、喉が蠢き、赤い液体が唇から僅かに零れて乳房を濡らし、滴って臍から内股へと流れ落ちる。

女は頬を染め、強い酒精が身体に染み渡ってゆくのを感じて、赤らんだ頬を、濡れた唇を緩める。

そして、更に強い媚薬の薬効が腹の底に行き渡ってゆき、胎がじわりと熱を帯びて来るのを感じて、ほう、と息を漏らした。

「ねえ……おねがい……もつと……きもちよくして……あたし……カラダが……すごく熱くて……火照って……もう、欲しくて……たまらないの……」

女は潤んだ目で男の顔を振り返り、艶めいた笑みを浮かべながら男の唇に自分の唇を寄せていく。

唇を合わせたまま、口に含んだ赤い液体を、男の口内に流し込む。そして、自分の腰に添えられていた男の手を取り、自分の乳房へと導いた。

ほんの三年前までは、花開く前の蕾のような小娘のそれであったそこは、昏い快楽に晒され続けた結果、熟れた果実のように膨れあがり

その頂上でツンと上を向いている桜色の蕾は、屹立して雄に摘まれるのを待ち望んでいた。

手の平に収まらぬその大きさと、しっとり吸い付くような乳肌の質感と、完熟しきっていない、柔らかさと弾力の絶妙なバランスを。

掌の内でぐねぐねと転がり、僅かな芯を感じる乳首の感触を、女の弱点をそれと知って責め、焦らし、捏ねる瞬間、ピクンと震える女の反応の愉快さを。

男の手が確かめるように、丹念に、じつくりと、焦らし、煽り、強く、弱く、擦り、掻き、撫で、摘まみ、揉む。

「はあう……あん……はあ、はあ、ああんっ……ん……ううっ……んはあっ……あう、うくう……んあんっ……はあ、はあ、はあっ……ああっ……ん……んんっ……」

女の喉から蕩けた吐息が漏れ、火照った頬が緩んで笑みを象る。熟れた乳房を苛められ、自分がゆつくりと雌へ墮とされていくことを悦んでいるかのように微笑んでいた。

胎の奥の疼きは、今もなお、彼女の躰の内側を炙り続けている。元はと言えば魔王に植え付けられた呪詛である淫らな疼きを鎮めようと彼女は考えていたのだ。

疼きを鎮める為には雄に操を捧げねばならない、しかし雄に躰を許せば許すほど、精を注がれば注がれるほど、躰の内側を苛む疼きは強く、深くなつてゆく。

やがて疼きは躰の外側へと湧き出で、雄たちの愛撫は無垢な少女の肉体を急速に育て、注がれた精は僅かの間に少女を蠱惑的な女へと成長させた。

彼女自身の心は未だ処女である。だが、たわわに実った肢体は無意識に雄を誘い、雄は彼女の躰を求めずにはいられなくなる。

今の彼女は、ひとたび雄に触れられ、耳元で囁かれれば容易に躰の疼きは吹き上がり、心は肉欲に飲み込まれ、自ら雄を求めて縋ってしまう。

それは、魔王の術に堕ちて完成してしまった魔性。未だ年若い少女の心を置き去りに、肉体だけが雌の躰へと墮落し続けている状態なのだ。

「はあっ、ああっ、ああ、あふ、ああんっ、ふう、ふう…う、ううっ、ひ、んっ、んうんっ…うあっ、んんっ、あっ、あはああんっ！あぐ、うは、あああーっ！」

そして、男にとって今の彼女を籠絡するのは兇戯にも等しい技となっていた。

今回は、村の片隅で、すれ違いざまに一言、「またあの屋敷で」と耳元に囁いて肩をポンと叩いただけなのだ。

すると彼女はぶるっと震え、唇をわなわなとさせたかと思うと、瞳の光が薄れ、霞んでいった。

催眠術にかかるという事は、意思や自制心を封じられるという事でもあり、心の枷が外され、術師の言うままになってしまうという事でもある。

今の彼女は、邪な催眠術によって少女の心を忘れ、身体を炙る疼きを抑え込むことを止めた、只一人の肉欲に溺れる雌となってしまうのだ。

そうして昼過ぎになると彼女は一人で、誰にも見つからぬように外套を被って男の家へと訪れた。普通の家だったはずの男の家は何故か二階建ての立派な屋敷になっていたが、彼女は疑いも持たず、まっすぐにこの寝室に辿り着く。

扉を開いて男を目の前にすると、彼女は笑顔を浮かべ、リバースの腕輪を外し、剣と一緒に廊下へ放り捨てると、外套も脱ぎ捨てる。

そして、恋人に見せるような蕩けた笑顔を浮かべて男に駆け寄り、抱きついたのだ。

それからはもう、彼女は男の言いなりである。キスをしろと言われれば、胸を押し当てながら自ら舌を絡ませる。

脱げと言われて煽情的に男の眼前で魅せつつ脱いで裸になり、啜えろと言えば悦んで啜え、舐めしゃぶる。

男の前で自慰をしてはあられもなく喘ぎ、男のモノを乳房で挟んでは擦りつけ、先端を舌で突く。

そして、吐き出された男の精を余さずに飲み下し、溢れたものを躰に擦り付けて悶える。彼女は男の命ずるまま、淫蕩の限りを尽くしたのだ。

「はあ、はあ、はあ、あん、んう…も、もっとお…もっといっぱい突いてえっ…ああんっ！ああっ！ナカ、いっぱいっ！すごいっ！すごいっ、お、奥に、当たってるよおっ！」

そして、今。

一昨年までの少女は、夕暮れのベランダでディメルンの森に向かって全裸を晒し、媚薬入りの葡萄酒と身を焦がす疼きに酩酊しながら雄のモノを啜えこんで喘いでいた。

男が乳房を弄びつつ、適度なタイミングで膝を動かせば、むちむちとした彼女の健康的に実った肢体がゆさゆさと揺れ、股間に突き立ったモノが彼女のナカを抉る。

彼女の躰は膣内から迸る性感に打たれてびくびくと震え、首を振り、あごを跳ねさせ、ポニーテールを振り乱し、手足の先を突っ張るようにして躰を駆け巡る悦びに堪える。

堪えようと歯を食いしばっては、弾かれたように口を限界まで開いて喘ぎ叫ぶ。渴いた唇を無意識に舌で舐めては艶やかに濡らし、汗と涙と涎は溢れて止むことがない。

少女の肢体はすっかり男の肉体に馴染み、少女の膣内は男のモノの形をすっかり覚えてしまっている。男に抱かれることが至上の悦びとなるまでに導かれてしまったのである。

「あああんっ！き、気持ちいいよおっ！はあっ、はあっ、あぐうっ！あ、アソコの奥、いっぱい、えぐられてるうっ！すごい、感じちやううっ！あ、あああっっ！」

掻かれ、突かれ、扱られ続けた彼女の膣内は既に男のモノの形を心地よいものとして覚えてしまい、花芯はすっかり充血し、子宮が降りてきてしまっている。そこを雄のモノで叩かれた結果、子宮口が開いてしまっていた。

即ち、雄の精を迎え入れる準備が整ってしまっているのだ。これまで幾度となくモノを啜えこみ、精を注ぎ込まれてきた彼女の胎内はすっかりこなれてしまい、どのような雄のモノ、どのような精であっても受け止め、性感を最大限に感じられるようになってしまっている。

「はあ、あぐ、ううっ！はああっ、はああっ、はあんっ！はあ、はあ、はあ、ああっ…お、お願い…もう、ガマン出来ない…このままイかせてえっ！……」

人間の雄に幾度となく犯されてきて、これまでキャロンが妊娠しなかったのはリバーズの力の影響だと彼女は信じているが、実はそのような力はない。

人の仔を妊娠、出産することによって吸収する魔力の純度や量に影響が出ないようにするため行使されたラモー・ルーの権能によるものである。

今のキャロンの胎内はラモー・ルーの植え付けた淫紋が放つ過剰な魔力に満ちており、人間の精子が生存できない状態になっている。

彼女が人の子を産むことが許されるのはラモー・ルーの気分次第なのであり、現状、それは許されてはいない。

しかし、魔物が精子を注ぐときには、同時に自身の魔力を彼女の躰に注いでいるため、魔王の権能を強化する行為となり、精子は子宮でも生き残る。

同様に、魔物が行う蜜の吸収行為は、彼女へ強い快楽を齎すことによって蜜を濃縮させる作用があるため、これも権能の効果外である。

魔物と人の妊娠、出産は、種別によって様々だが、概ね魔物が注いだ魔力と人間の卵子や愛液、膣壁の排泄物を使って子供の身体が作られている。

生まれる子供は母体の魔力を過度に吸収しないため、妊娠してから出産までの期間が平均一日未満とごくわずかであり、胎内で意志を持つと、自ら胎外へ出てゆく。

そのため、彼女はこれまでに幾度も蛙や蜂、蜘蛛などの魔獣の卵を産まされて来たし、魔物の幼生体を出産させられたり、スライムや触手を胎内で合成、増殖、排出させられてきたが、人間の子供を妊娠することが無かったのである。

「ああっ、いっちゃう、また、あたし、いっちゃうよおっ、あっ、あっ、だ、だめ、もう、あああっ、はあっ、あ、イク、イクううっ、んう、んんーっ！」

雄のモノに膣壁を抉られて、再び、身体を痙攣させ、絶頂に震えるキャロン。脳内が真っ白に飛び、躰が空へと舞い上がるような快感が全身を駆け巡る。

そして、宙に浮いた身体の、むっちりとした太ももの先：すらりとした脹脛のさらに先：足首に金色の鎖が掛けられ、拘束されているのを彼女は幻視した。

すると、一気に身体は落下し、地面をすり抜けて赤く、熱く滾るマグマの海へ堕ちてゆく。そこに一本の肉の杭が突き立てられていた。避けることも叶わず、ぐんぐんと身体は落ちてゆき、ずちゅり、と水音がして彼女の躰は直立する太く逞しい肉の杭に貫かれ、縫い留められていた。

「かはあっ、あぐ、うあああああああっ！！」

背中を弓なりに刺らせて痙攣し、一瞬、意識を失って幻覚の中にいた彼女を覚醒させたのは、雄の肉棒による強烈極まる一撃だった。

力強く最奥まで貫き通された瞬間、キャロンは目を覚ますと同時に強烈なアクメに打ちのめされ、悲鳴のような嬌声を上げ、結合部から潮を吹いた。

全身を駆け巡る絶頂の余韻に震えながら、彼女は緩慢に男の方へ振り返る。男を見る彼女の視線は悪戯っぽい非難と欲情が混ざり合っていたが、瞳はすっかり潤んで蕩け、かけられた催眠術の深さを露わにしていた。

「はぁ……はぁ……あ、んんん……ふう……っ……はぁっ……あぁ……いったばかりなのに……まだこんなに硬い……」

「ふふふ、まだまだ愉ませてあげる。今夜は寝かせてあげないからね……」

恋人のような会話を交わしながら、男はグラスを傾け、ワインを少し飲む。女を狂わせるこの媚薬は、男に対しては強い強壮効果がある。

飲めばむらむらとして、女が欲しくて堪らなくなり、三日は勃起が萎えず、何回注いでも精液が尽きることが無い。

そして、残ったワインを口に含むと彼女の頬を撫でながら手前へ傾け、唇を奪う。

「んんっ……もう……ふふ……んむ……あ……ん……んあ……はぁっ……はぁ……あむ……んう……んっ……」

唇を合わせると、男はキャロンの口の中へワインを流し込む。彼女の喉がこくこくとそれを嚥下し、腹へと流し入れる。

そのまま舌を絡ませ、ワイン味の唾液をやり取りし、キャロンの唇を愛撫する、やがて彼女は気持ちよさそうに目を閉じ、吐息が零れだす。

彼女はもはや、この男と唇を交わすのが何度目になるのかも覚えてはいない。そして、これが何人目の男とのキスなのかも。

恋人に許す以前から、彼女は魔物に唇を汚され、村人や兵士たち、侍従たちに奪われ続けてきたのだ。そしてそれは恋人であるペルルとのそれよりはるかに多い。

今や彼女にとっては、キスされるという事はセックスをするという事に直結してしまっていた。

どんな敵と戦っていても、どんなに激しく抵抗していても、キスされた時点で彼女は反論や抵抗を放棄するような躰になっていたのだ。

「キャロン……もつと気持ちよくなりたいかい……？」

「うん……おねがい……あっ……」

男はキャロンの耳元で囁くと、彼女は眉根を震わせ、赤らんだ頬を緩めて懇願した。彼女の返事を聞くと、男は彼女の身体を前に倒した。

キャロンがガラスのテーブルに手をつくると、突き立ったままのモノが彼女の膺壁を強く抉った。

「いい子だ……何度でもイかせて、もっと淫らにしてあげる……元に戻れなくなるくらいにね！」

「はぁあつ、あぐうつ……」

苦しげで、しかし恍惚を伴った喘ぎが唇から洩れる。

男は嗜虐的な笑みを浮かべつつ、彼女の腰に手を当て、リズムカルに押し込んでゆく。

「あああつ、や、ああんっ、はぁ、はぁ、はぐうつ、う、んっ、んんうつ、ふ、深いつ、抉られてるよおつ、あああんっ！」

釣り下がった双乳がガラスのテーブルの縁に押し当てられ、彼女自身の動きに合わせてぐねぐねと捏ねられている。

男には彼女の乱れた髪から、うなじ、肩甲骨、背筋、脇のくびれ、お尻までがすっきり見渡せている。

首を振りつつ喘ぎ悶える姿は煽情的であり、汗ばんだ背中やお尻が蠢く様は実に淫らで、蠱惑的であった。

男は片手の指を立て、じつとりと湿った彼女の背中を触るか触らないか程の距離で、蛇が這うようにゆっくりと撫でてゆく。

すると彼女は動きを止め、震えながら触っている指の感触を味わおうとするのだ。

「あ、あぁつ……あぁ……はぁ、はぁ、はぁ……あつ……ひ……ひう……ん……んんっ……あ、はぁん……」

そうしておいて、指が彼女のお尻の割れ目に達すると、両手の指で豊かな尻たぶを〇回、ゆっくりと、左右逆に回るように擦る。

すると彼女の背が震えだす。性感も高まっているのだろうか、もう一つ、彼女はその経験上、覚悟しておく事があったのだ。

それは過去、幾度となくされた行為。彼女のむき出しの尻肉を目にした牡たちが良く行った行為。

そして、その記憶を掘り出したこの男は、それが彼女の最後の抵抗と心を折るために幾度となく使われたことを知っているのだ。

「…い…いや…：…やめて…：…おねがい…：そんなことしないで、あたし、なんでもしてあげる…いやあ…：だめ、それ、だめなの…：ゆるして…：」

哀願するキャロン。普段ならそのような姿は見せないだろうが、術にかかっている今は、心の中がむき出しになっている。

まるで悪戯を叱られている小娘のように目を潤ませ、男の方に体を振って縋るように言う。

男はそんなキャロンに向かって笑みを浮かべ、しかしその両手を容赦なく彼女の桃尻に向かって振り下ろしたのだ。

「ああああーっ！はあ、はあ、ひやああん！はあ、はあ、はあ、はあああんっ！もう、だめえ…：ああああんっ…！…あひいひいんっ…！」

パシーンと肉を打つ音が鳴るたび、キャロンは悲鳴を上げ、上体を反らし、あごを跳ね上げ、口を大きく開けて叫んだ。

男が太鼓を打つように手を振り下ろすたびに、彼女の尻肉が次第に赤く腫れてゆき、ガラステーブルの上で乳房が踊る。

しかし、モノが突き立ったままの結合部からは蜜が溢れて椅子を濡らし、膣奥は切なげにきゅきゅとモノを締め付けていた。

彼女は魔王による破瓜の経験から、本来なら露わになることのない被虐的な嗜好を発露させられてしまっている。

リバースの力によって癒される為、傷ひとつ残らない彼女の体であるが、本来なら全身残らず傷だらけの筈なのだ。

現状、治らないのは処女膜と、子宮に刻まれたラモー・ルーの淫紋だけである。

「どうした？締め付けが強くなっているぞ？叩かれて感じているな？もっと欲しいのか、淫乱な王女め、そら、くれてやるぞ！」

「あああんっ！言わないでえ…：はあああんっ！いやあ…：ひいんっ！も、もう許してえ…：きやああんっ！お願い、もうやめて…：くううっ…！」

胸を反らし、歯を食いしばり、顎が外れるほどに口を開いて悲鳴を上げ、首を振って髪を乱し、背中を玉の汗が流れる。

苦悶の表情を浮かべながらも口元は蕩け、打たれる尻は痛みと変換された快感に震え、腰は蠢いて男のモノを握り込んで抜く。

身体が勝手に痛みを快楽へと変換する矛盾の中にキャロンは飲み込まれ、あられもなく喘ぎ悶えながら絶頂へと追い立てられてゆく。

「ああああーっ！あ、あたし、も、もうダメ、い、いっっちゃう、ひゃうんっ！お、お尻叩かれて、いっっちゃうよおっ！あぐうっ！」

「そうか、イきたいのか、尻を叩かれていく変態め、いく前に前をしてみる。お前の国民がお前の淫らな姿を見ているぞ？いくのはその後だ！」

男に声を掛けられ、上体を起こして前方に広がる森を見るキャロン。すると、森の樹々一つ一つがいつの間にかラルの人々の姿に変わっていたのだ。

もちろんこれは催眠術によって引き起こされた幻覚だ。しかし、リバースの腕輪もなく、絶頂状態にある彼女がそれを看破できるはずはなかったのだ。

「いやあああああーっ！だ、ダメ、見ないで、見ないでえええっ！お願い、あたしを見ちゃいやああっ！」

目を見開き、涙を零しながら叫ぶキャロン。目の前に見える人々は眉を寄せ、彼女の痴態から目を離さず、ひそひそと心無い言葉を交わす。

（王女がはしたなく喘いでいるぞ）（抱かれて嬉しそうに乳を揺らすとはなんて淫らな王女だ）（知らぬ男に貫かれて尻を振るとはなんて淫蕩な）（あれがラルの王女だなんて）（リバースの剣士もあれじゃ村娘と変わらない）（尻を叩かれて喜ぶなんて変態王女だ）

その姿を見れば見るほど涙が溢れ、その言葉の一つ一つが彼女の心を砕いてゆく。そしてその痛みが快楽の炎と化して肢体を焼くのだ。

「おっと、暴れるんじゃないよ。あんたのお相手は俺だ。たっぷり愉しませてもらうからな」

男はキャロンの細い躰を抱きすくめ、腕で彼女の両腕ごと締め付ける。

そのまま、流れるような素早さで片手を乳房に、片手を恥部にと滑らせる。

しかもキャロンは体の動きを封じられ、しかも、両脚は思い切り広げられた状態で男の膝によって固定されてしまっている。

柔らかく、弾力に富んだ少女の肉体が、男の腕の中にすっぽりと収められてしまっている。

そして、彼女の眼には眼前の森の樹々一つ一つがラルの人々に見えてしまっている。

「あぐうんっ、あ、ああ、いやあっ、見ないで、お願い、こんなとこ、みないでえ…あつ、く、んんっ、ああっ、ああ、はあ、はあ、ひうんっ！」

男の膝が上下に揺られるたび、ポニーテールの髪が跳ね、肉が撓み、伸び、縮む。眼前の光景を見たくないと言を振り、それでも快楽に飲まれてゆく。

男の手にすっぽりと収められた乳房が揉まれてぐねぐねと蠢き、男の手の内になく乳房は上下に揺さぶられる。

男の片手が彼女の秘部の襞を擦り、モノが襞を割って注挿され、襞の上から手で扱かれるたびに蜜が飛沫く。

「んうん…ああ、はあ、ううんっ…はあ、はあ、はあ、はあ…あ、ああっ…ん、ううっ！あ、ああんっ！あ、はあっ、はあっ、ああーっ！」

『森の囁く声』人々の囁きが聞こえる。『夕日のきらめき』人々の視線が見える。王女なのに、裸を村人に向かって見せちゃってる。

村人たちに向かって足を開いてあそこを見せて、男に犯されている所を見られちゃってる。死にたくなるほど、恥ずかしくて、たまらないよ。

でも、「どうして？こんなに恥ずかしくてたまらないのに、身体はどんどん熱くなって。息が出来ない程苦しくて、目の前がくらくらしてくる…」

「心臓がどきどきする音が聞こえる。おっぱいが鼓動で波打ってる。おしりがひくひくしてる。太ももがびくんびくんしてる。お腹が、あそこが、子宮がどきどきしてる。

カラダが全部心臓になっちゃったみたい。……なんで？ああ、どうしよう、あたし、みんなに見られてるのに、今、すごく、気持ちよくてたまらないよお……！」

「そうか、そんなに気持ちいいのか、それならもつと良くしてやるよ」

「え、うそ、あたし、口に出して…ひゃああんん！うっ、うぐ、あひいいいんんっ！はげし、ああーっ！だめ、そんなにされたら、ああっ！がまんできなくなっちゃう！」

男の催眠術によって、キャロンは内心で考えていることが自然と口をついて出てしまう暗示が掛けられている。

暗示というのは特に、快楽に耽っている時など、自我が緩んでいる時に効果が出やすくなるものである。したがって、今回も途中から思考が口に出てきてしまっていたのだ。

これにより、より強い羞恥と暗示の強化がなされ、キャロンの躰はより深い快楽の沼に沈み込んでゆく。

「我慢なんてする必要はない。そら、村人に向かって本当の自分をさらけ出すんだ。王女たるもの、村人たちに隠し事をしてはいけないぞ」

「あっ！あぁっ！あう、うくんっ！はぁ、はぁ、あぁんっ！気持ちいい、気持ちいいのおっ！見て、みんな、あたしを見てえっ！」

男の低い声が耳朶を擽る。男の逞しい腕がむちむちした肢体を縛り付ける。男の大きな手が乳房とクリトリスを苛める。男の膝と腰が、お尻を突き上げる。

髪を振り乱し、喘ぎ叫ぶキャロン。もう自分が何を口走っているのか分かっていない。全身を駆け巡る快楽にすっかり呑み込まれてしまっている。

小柄な肢体が撓み、陰裂に突き立ったモノが蜜を飛沫かせながら上下する。身悶える動きは全て男の腕の中で封じられ、動かせる首と足指だけが快感の享受を示している。

まるで、女のことを無視して、男の自慰の為に肢体が使われているような、無遠慮で乱暴で自分勝手な行為。

しかし、キャロンの身体は男の行為をすべて受け入れ、身体中に走る電流のような快楽に幾度も打ちのめされながら悦んでしまっていた。

乳房を乱暴に弄られ、乳首を抓られ、男の腰で尻を叩かれる。無遠慮に性欲を叩きつけるような行為にすらキャロン快感を覚えていた。

意思を封じられ、性欲に晒され続けたことで、彼女の秘められるべき本性、マゾヒストとしての側面が露わになってしまっているのだ。

「そう、お前はそういう女なのだ。キャロン、お前の心の奥底に潜む本質を言い当ててやろう。それはな、『性欲』だ。牡を求め、身体を開き、精を受けて悦ぶ者だ。ラモー・ルーに犯されたから？たくさんの牡に汚されたから？それは違う。

ラモー・ルーはお前を求め、導き、本質を暴いた。そうして露わになったお前の本質に、他の牡共は魅き寄せられたのだ。本質を暴かれたお前は牡のモノなしでは生きては行けぬ。牡を魅き寄せ、牡を啜えこみ、精を啜り、快楽を食って生きる。牡は皆、お前を求め、いきり立った欲望を叩き付けずにはいられない。それがお前の本質なのだ、キャロン。

お前はラルの王女であるのにも関わらず、夢魔（サキユバス）の如き本質を抱えているのだ。なんとという矛盾。キャロン、お前は夢魔に生まれるべき女だったのだ！」

「いや、いや…やめて、おねがい、もう、やめて、あぁ、ダメ…あぁっ…はぁ、はぁ、ハア、ハア、あ、熱い…カラダが…熱い、あぁ、言わないで…これ以上…」

あ、あふれちゃう…ハア、ハア、ア…も、許し…アア…いや…駄目…気持ちいいの…アソコから、いっぱいあふれちゃう…はあ、はあ、はあ、ア、アアアツ！

も、もっと、おっぱいを揉んで…もっとアソコを弄って…あ、あたしのナカ、えぐって、あ、あたしを、弄んで、気持ちよくしてえっ！もう、ガマンできないのおっ！」

男の吐息が、囁きが、呪詛がキャロンの耳朶を叩き、心を抉る。それは催眠という猛毒で彼女を急速に蝕んでゆく。次第に彼女の動悸と吐息は荒くなり、喘ぎ声はあられもない叫び声となって迸る。

彼女の瞳に光は既に無く、昏い、欲望の色で染まっている。そして、彼女は締め付けられている躰を身じろぎさせ、自ら快感を求めるように蠢き始めたのだ。

首を振り、あごを跳ね上げ、胸を反らせ、腰をくねらせ、尻を振り、膣道を締め、太ももを震わせ、爪先を立たせ、脹脛を硬直させる。それは総て快感を享受する能動的なものだった。

汗にまみれた背中が男の胸板と擦れる、男の太い腕が蠕動する肢体を締め付ける、男の掌が突き出された乳房を乱暴に揉みしだく、指が乳首を強く摘まむ、男の荒い吐息が耳朶を擽る。

尻が、太ももが男の体に打ち付けられる、中指が花卉を捏ねる、締め付けられる膣道を掻い潜り、モノが激しく注挿される。子宮の入り口を亀頭が幾度も叩き続ける。

摩擦が、緊縛が、痛みが、痛痒が、くすぐったさが、ぞくぞくと背筋を走る快感が、媚肉を打たれる熱さが、躰の最奥を肉杭で打たれ続け、溢れ出る強烈なアクメが、潮が。

少女の、乙女の、剣士の、王女の、娘の、女の、牝の肢体を炙り尽くし、滴る愛液と全身へと燃え広がる性感の炎が、熟れた果実を絶頂へと追い立ててゆく。

「そうだ、もっと声を上げる。お前の本質を、お前がよがり、悶える姿を。男のモノを啜えこんで喘ぐ様を見てもらえ！私はこんなに淫らな女です、とな！」

「はあ、はあ、あ…あ、あたしは、え、エッチが大好きな子なんです！…お、男の人の…モノを、入れられて、いっぱい感じちゃう、淫らな女なんですっ！」

あたしを見て！おっぱいが揺れるところも、震えてるおしりも、びしょびしよなアソコも見て！男の人に犯されて、よがり声を上げて、何度でもイっちゃああたしを見てえっ！

これがあたしなの！知らない人のお×××××を自分から啜え込んで、おっぱいを揉まれて、お尻を叩かれて、すごく感じて、気持ちよくなって、イっちゃうのが本当のあたしなの！セックス中毒で、淫乱で、エッチな子なの！」

キャロンが森に向かって叫ぶ。彼女の眼には森の木々一本一本が村人に見えている。彼女は、目に涙を浮かべ、しかし頬を緩め、耳まで朱に染まった顔のまま、叫ぶ。

それは、男に焚きつけられたとはいえ、彼女が秘め続けた欲望の肯定、その端緒であることは間違いなかった。

彼女は、堰を切ったように叫び続ける。まだ未熟な躰であった頃から性欲に曝され続け、恋も知らぬうちからセックスの経験だけが積み重ねられた。

雄たちによって弄ばれて歪められ、成人に至る以前から快樂の沼に沈められ、その場所を日常とまで認識するに至り、色情狂へと堕ちた事を受け入れた少女の告白であった。

「よく言った！えらいぞ、キャロン。ご褒美にイかせてやろう！」

「ああっ！う、うれしいっ！はあっ、はあっ、お願い、イかせてえっ！息が出来なくなるくらい突いて！もう、何もわからなくなるまでイかせてえっ！」

気持ちいいの、ああっ、はあっああんっ！気持ちいいよおっ！すごい、すごいの来ちゃう、来ちゃうのおっ！！お、お願い、一緒にイって！ナカに、いっぱいちょうだい！

熱くて、濃いのをあたしのナカに浴びせて欲しいのおっ！あああっ！あぐ、んんあっ！ああ、イク、イっちゃうよ、あたし、もう、イっちゃうううっ！！！」

男はキャロンの告白に応えるように、彼女の腰を下へ押さえつけながら、しとどに濡れたヴァギナへと燃え盛る肉欲の化身を突き上げる。

それは陰唇を割り、熱く煮え滾る愛液の海を割り、肉襞の一つ一つを抉り、きゆうきゆうと締め付ける膣道に抗するように膨れ上がりながら突き進み、

すっかり下がり切った子宮の入り口、子宮口、子宮頸部、ポルチオへと辿り着く。男のモノの先端、精液にぬめる亀頭がポルチオを過たずに捉える。

幾度となく叩かれ、幾度となく意識が飛ぶほどの絶頂に追いやられ、すっかり開発された究極の性感帯、ポルチオ。

それは騎乗位の時、最も効果を發揮する。太く、長く、硬い男のモノをすべて啜えこみ、その穂先が今、彼女の急所の中の急所を貫いたのだ。

「あっ、ああっ、くうっ、ん、んんあっ！うぐ、うあああっ！はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、うっ、あああっ、んうっ、うあああっ！あ、あああああっ！はあああんっ！」

その瞬間、キャロンの身体が弾けた。高い悲鳴を上げ、全身を反らせ、あごを跳ね上げ、手指、足指まで突っ張り、硬直する。

そして、全身の肉がびくびくと痙攣し、貫かれたアソコからは潮とおしっこが同時に溢れ出て、びちゃびちゃと床を濡らし、やがてペランダの柵を越え、森へと落ちてゆく。

男のモノから迸った精液は胎内で逆流してアソコから溢れ、勢い余ったモノは膣から抜けて、少女の汗ばむ尻から背中を精液で汚してゆく。

少女は目を閉じ、快楽の余韻に微笑みを浮かべながらテーブルに伏せていた。吐息は安らかだが、時折、肉体の痙攣で寸断され、短い吐息になったりしていた。

今、彼女の意識は一時的に失われてしまっていた。強すぎる快感の海に放り投げられ、どこまでも高く、どこまでも深く落ちていったのだ。

男はキャロンが絶頂に耽溺する様を眺めながら、愉悦に満ちた笑みを浮かべた。

「気持ち良かっただろう？キャロン王女。もっと、もっと気持ちよくしてやるぞ。まだまだ終わらせてはやらん……フフフ……」

快楽の迷宮に迷い込み、邪悪な陥穽に落ちた少女は、悪意に満ちた男に誘導されるまま、裸で夜を彷徨い続けるのだ。

そして、次にキャロンが意識を取り戻した時、彼女は壁に背をもたれさせて立っていた。すると、未だ朦朧としているキャロンの前に男が立ち、左足に手を触れると、内股に手が差し入れられる。

びくん、と彼女の眉が震える。差し入れられた手は更に奥へと進み、脚を広げさせられると、膝に男の腕がかかり、いきなりぐいっと持ち上げられる。

一本足で立つ不安定な体勢にさせられて、ようやく目を覚ますと、目の前に裸の男の胸板があった。

「あ……」

見上げるとそこにはよく見知った顔があった。こんな所にいる筈がない、とは今の彼女は思えなかった。

脚を抱えあげている腕の太さ、厚い胸板、そして男の臭い。その全てが彼女にその男が誰なのかを認識させていた。

酩酊し、快楽に溺れた彼女は、今、夢と現実の区別がつかなくなっている。そこへ催眠術で、現実と暗示の区別を失わされている。

快楽と催眠に曇らされた翡翠色の瞳が、その男のにやりと笑う顔を映し出していた。

「……マリオ……？どうして？ここに……あっ、いやんっ、え？あたし、どうして裸に……ひゃあんっ！」

状況を理解できず、困惑するキャロンにマリオ？は彼女の乳房を揉みしだく事で答えた。お互い裸で向き合い、片肢を抱えあげられた体勢は、彼女がアソコを男の前に広げ晒している状態である。

しかも、アソコからは露が滴って太ももを伝っており、その真下で太く逞しい肉蛇が今にも貫こうとしているのだ。

逃げ場などなく、既に蛇の罅の内側にいる蛙のような状態だ。嫌でも状況を理解させられてしまう。

「……入れて欲しいですか？キャロン王女」

耳元で、マリオ？の低い声が彼女の耳朶の産毛を撫ると、キャロンの躰の芯が快感に痺れ、僅かに身震いした。

そして、自分の身体が既にできあがってしまっていることを認識し、これから男のモノで子宮の扉を叩かれるという状況想像し、思わず喉を鳴らした。

しかも、幾度となくこの身を貫いたマリオのモノ。あの森で初めて奪われ、膣内を荒々しく踏み破り、絶頂を何度も味わわれ、溢れるほどに白濁を注ぎ込まれたモノ。

狭い小陰唇を押し広げるほど太く、子宮口を易々叩けるほど長く、幾度白濁を吐いても萎えぬほど硬く、膣壁の性感帯を逃さぬようにごっごつした、焼けるように熱い、マリオのモノ。

吐息が荒くなり始め、顔が赤くなり、思考が萎えてゆく。肌が敏感になり、口が半開きになり、喉が渴いてゆく。

入れられたら、挿入されたら、突き込まれたら、貫かれたら、どうなってしまおうのか。きつと気持ちがいいのだろう。すぐく気持ちよくなれる。

自分は既にそれを知ってしまったている。拒むことなど初めから出来はしなかった。

（欲しい、欲しくてたまらない。この身体のどうしようもない疼きを、飢えを、欲望を満たしてほしい。気持ちよくしてほしい。絶頂を味わいたい、子宮を白濁で満たされたい。マリオの手で、身体で、舌で、モノで、あたしを、あたしのカラダを、アソコを、めちやめちやに犯してほしい！）

「お、お願い、マリオ……あたしのカラダ、いちばん奥まで貫いてえっ……！」

途中から思考が口をついて迸っていた事に彼女は気づいていなかった。間近に迫った雄の臭いに煽られ、その余裕もなかったのだ。

顔を朱に染め、吐息も荒く、目の縁に涙を浮かべ、男の手に荒々しく掴まれた乳房は張りつめ、桜色の乳首が上向きにツンと勃っている。

キャロンは唇をわななかせながらマリオ？の顔を見上げ、精いっぱい笑顔浮かべると、自らの性欲を肯定し、男のモノで貫かれる事を懇願した。

「よくできました」

マリオ？は彼女の告白を嘲笑うように頬を歪め、腰を沈めてモノを膣口にあてがうと一気に腰を上げた。

ずるりと亀頭が膣口に吞まれるように沈み、そのまま陰茎が根元まで埋まるほどに突き上げられてゆく。

「ああっつ！あう、んあああああつ！あぐ、う、うううっ！くああっ！あああーっ！」

一気に突き入れられて軽く達してしまい、顔を歪め、呻きながら喘ぐキャロン。しかし彼女の表情には喜色が浮かんでいた。

キャロンは小柄で、男とは身長差がある。その二人が立位の立ち鼎をすると挿入時にキャロンの腰が浮いてしまう。

片足立ちにさせられているキャロンは、奥まで挿入された時には爪先立ちに成らざるを得ない。

結果として、キャロンの体勢は苦しいものになってしまう。しかし、それ以上に挿入が最も深くなり、快感も強くなるのだ。

キャロンは野外でマリオとセックスをする時、この体位を好んでいた。服や体が汚れず、手早く、快感が深いからである。

「うぐ、んんんっ、ううっ、んはあつ、ふ、深い……よおっ、あう、うぐ、うううんっ、ナカ、いっばい……はあつ、はあつ、はあうっ！っく、うはああんっ！」

しきりに首を振り、髪を振り乱しながら喘ぐキャロン。上向きに勃起した乳首が乳房の揺れに合わせてふるふると動き、

抱えあげられた片肢が拘束から逃れようと悶え、ガーターリングに締め付けられた太ももがむっちりと強調される。

小柄な少女の体に女としての肉が強調されるようにしているキャロンの肢体。身長だけなら未だ少女に過ぎないのだが、その身体が纏う肉の全てが

少女を女として完成させてしまっていた。乳房も、腰も、尻も、太ももも、唇、うなじ、腋までもが男を誘って止まないセックスアピールになっている。

そしてその内側、生殖器に至るまで彼女を雌として完成させている。それは生まれつきのものに合わせて、ラモー・ルーの成長促進術によるものであった。

この魔術により、少女の心のまま女となり、性欲を煽られ、自らその蜜を濃縮させてしまうのだ。いつか、魔王に収獲されるその日まで。

「あうっ、うっ、う、うああっ、ああっ、ああんっ、だ、ダメ…すごい、うっ、イイよおっ…はあっ、あうっ、うぐうっ、んはあっ！」

そうして女となり、男の体に完全に馴染んでしまったキャラコの肢体は、モノを突き入れられた直後から敏感に反応してしまう。

しかも、目の前にいるのはマリオ？である。身体を重ねた回数人間では一番多いのだ。

マリオ？が腰を振り、モノを突き入れるたびにキャラコの肢体は快感に打ち震え、思わず両手を男の首の後ろに回し、縋りついてしまう。

しかし、重力と身長差によって挿入は深くなるばかりであり、あっという間に子宮口に到達してしまう。

「はあああんっ！ああっ、ううっ！はあう、あっあっ、はぐうっ！好き、好きなの、うううっ！はあ、はあ、はああっ！お願い、もう、うぐっ、あ…あああーっ！」

男はキャラコのお尻に手を伸ばし、尻肉を揉みしだきながら少女の裸身を抱き寄せると、キャラコの嬌声が一際高くなる。

二人の身体が密着し、突かれる度にキャラコの爪先立ちにさせられた肢が震え出す。

キャラコとマリオの身体の相性は最高に近い。それもそのはず、ラモー・ルーに快楽を教えられた女と、ラモー・ルーに乗り移られた男である。

ラモー・ルーが知る、彼女の性感帯は全てマリオの身体が覚えており、王女となって以降のキャラコにセックスの全てを教え込んだのだ。

キャラコはマリオと会うたびに抱かれるのが半ば日常と化し、抱かれるたびに幾度となく絶頂に導かれ、身体は更なる快楽の沼に沈められてゆく。

その結果として、彼女の肢体はすっかりマリオの肉体に馴染み、今や指と舌が触れていない箇所はなく、前後の穴と口はモノの形を覚えさせられた。

キャラコのカラダは軽く胸を触れられるだけでアソコに湿り気を帯び、一突きされるだけで軽く達してしまう程に仕上がってしまった。

「あっ、あう、はあっ、ああんっ、いやあ、はあんっ、んっ、んっ、ああう、あっ、あっ、ダメ、ああっあああーっ！はう、あうああっ、あーっ！あっ、あううっ…！」

マリオ？が腰を突き上げるたび、キャラコは悶え、喘ぎ、髪を振り乱し、肢体をマリオ？の肉体に擦りつけてしまう。

そのたび、豊かに実った乳房が熱い胸板に潰されて歪み、勃起した乳首がぐにぐにと握ねられる。無意識に更なる快感を求めてしまっているのだ。

背中には汗が滲み、掴まれている尻肉は赤く充血した跡が残っている。そして結合部からは汗と蜜が混じりあったものが溢れ出し、

爪先立ちにさせられている脚の、むちっとした形の良い太ももを伝って脹脛へと流れ落ちてゆく。

「あたし、もう、もうイク、イっちゃうよ、はあ、はあ、ああ、ああ、もうイク、ああっ！気持ちいいの、止まらないの、マリオ、イかせて、あたしをイかせてえっ！」

強い快感にキャロンの瞳から涙が零れ落ちる。喘いでいるのか、悲鳴を上げているのか、もう彼女自身にも分かってはいない。

うわ言のように「好き」「イク」「気持ちいい」「愛してる」「お願い」「感じる」「ダメ」「大好き」「欲しい」「マリオ」といった言葉が喘ぎ声の合間に漏れ続ける。

意識が明滅し、視界にチカチカと光るものが見え始める。カラダの奥から熱いものが噴水のように吹き上げて来る。

マリオ？に抱きつく腕の力が強くなり、爪先立ちの肢と抱えあげられている肢が震え出す。彼女自身も把握している絶頂の兆候であった。

「ああああっ！はあ、はあ、はあ、ああイク、イク……マリオ、一緒に……熱いモノ、いっぱい出して……ああもうダメ、マリオ、好き、愛してる！お願い、一緒にイって！」

やがて堪え切れなくなったキャロンは遂に、片脚立ちになっていた肢を跳ねさせ、尻肉を揉んでいた腕の間を通してマリオ？の腰に絡ませると、全身で男の体に縋りついた。

その瞬間、彼女の全体重が男のモノに押し掛かり、これまでにない深さでモノが奥底へ到達した。

それは人が到達できる限界、ラモー・ルーが刻んだ淫紋の起点のひとつにあと僅かという所であった。瞬間、キャロンの身体を稲妻が突き上げるような、大滝が逆流するような、強烈な絶頂が襲い、あつという間に決壊し、最後の一線を突き崩した。

「ああっ！うぐっ、ああっっ！いやっ、あつ、はあっ、はあ、ああ、イク、ああーっ！あああああっ！あぐ、ひううっ！んはあっ、ああっ！はあっ、うっ、あああああーっ！！」

絶頂の瞬間、一際高い叫び声をあげ、キャロンはあごを跳ね上げながらマリオ？の肉体に強くしがみつき身体を震わせる。

同時にどくん、と膨らんだモノが大きく脈打ち、溶岩のように濃縮された熱く粘った白濁がキャロンの胎内へ浴びせ、塗り込め、満たし、溢れ、隅々まで汚し尽くしてゆく。

ぶちゆり、と音がして結合部から蜜と白濁が混ざりながら大量に溢れ、びくびくと痙攣しているアソコから流れ落ち、絨毯を染めてゆく。

強烈すぎる快樂が脳天から爪先まで、身体中を電流のように強烈に打ちのめしながら駆け抜け、キャロンの意識は真っ白に飛ばされていった。

やがて、糸が切れたようにしがみついていた腕を緩めると、壁に背中を預け、震える片脚をゆっくりと床へ戻すと、荒い吐息に乳房を上下させて快樂の余韻に浸り続けていた。

マリオ？が抱えていた肢を床に降ろすと、キャロンの肢体はがくりと力を失い、背中を濡らした汗で壁をゆっくりと滑り落ちる。やがて、お尻を零れ落ちた蜜で出来た水たまりに濡らしながら、肢を大きく広げた格好のまま座り込んだ。

絶頂後の至福に身を委ねるキャロン。汗と精液にまみれ、肉体は絶頂の余韻に時折ぴくんと痙攣し続けてはいるが、その顔はとても安らかな笑みを浮かべていた。

マリオ？はキャロンの広げた肢の間から白い泡の混ざった精液が溢れ出る様を見つめ、嗜虐的な笑みを浮かべた。お楽しみは、まだこれからだ。

寝室の大きなベッドで二人は手を重ね、指を絡め、腕を絡ませ、肢を絡ませ、舌を絡ませ、肉体を重ね、繋がり合い、抱き合っている。

既に日は落ち、ランプのオレンジ色の明かりが全裸で絡み合う男女を照らし、壁に大きな影を映し出していた。

純白のシーツは二人の身体が纏れるたび、女が掴み、握りしめるたびに皺を増やし、二人の汗と、女の愛液を吸っては濡れ、染みを増やしてゆく。

男の肉体の下に組み敷かれた女の肉体は、男の蠢きに合わせて震え、悶え、甘く蕩けた声を上げて男を煽り、煽られた男の動きは激しくなつてゆく。

女が幾度絶頂に追いやられたのか、彼女自身忘れていた。そして男もとうに数えるのを止めていた。

「ああっ！また、イっちゃうっ！はあっ、はあっ、あ、ダメ、あっ、あああああっ！」

彼女、今や王女であることもラルの剣士であることも、忘れ果てるほどに魔淫に堕ちた淫婦キャロンは、今日何十回目かの絶頂に果てた。

今、彼女を組み敷いている男の催眠術によって、最早自らの力では引き返せない程の陥穽に墮とされてしまったのだ。

男が彼女にかけた催眠術の内容は「自分の指示には全て従う」という、たった一項目だけである。

しかし、男はその術をラモー・ルーの眼を想起させる赤い宝石で導眠させ、更に言葉とセックスを用いて身体に直接植え付けた。

彼女にとって最大の弱点である性行為と精神攻撃を同時に仕掛けられては、ひとたまりもなかったのだ。

「はあっ、は：うっ！うあ：ぐ、うんっ！うんっ！あああ：太い：：もつと、突いてえっ：もつと：：そう：あぐっ：：お：深い：あう：奥まで来て：：あああんっ！」

彼女は今、村の近くの小屋で木こりに犯されていると思いきまされている。

男は催眠術の過程で、キャロンの性遍歴を読み取り、全て把握している。

そこへ男に催眠で誘導されると、すべての感覚が記憶から呼び起こされる。

実際に彼女を犯しているのは催眠術師の男であるのにも関わらず、自分を抱いたことのある雄の記憶が次々とその肉体に蘇り、襲い掛かる。こうして彼女は自分の記憶に犯され続けるのだ。

「はあ、はあ、はあっ！あああっ！あんっ！ああああっ！きやう、うんっ！すごくいいよおっ！きもちいいっ！あああっ！あたしの中、いっぱいにしてえっ！」

キャロンが目を開くたび、自分を犯す男の顔が次々と変わる。体位も変わる。肉体の重さも変わる。場所も変わる。老人にも、女にも、子供にも、獣人にも、小人にも、巨人にも、魔物にもなる。彼女の心は今、混乱の只中に追い込まれている。どこで、誰とされているのかさえ、もう認識できない。ただ、かつて身体を襲った快樂の記憶に翻弄され続けている。今、感じている快樂だけが彼女にとって唯一の真実になってしまっているのだ。

「ああああっ！また：またイク：イっちゃ：う、んああああっ！：：：はあ：はあ：もうゆるして：：おねが：い：あ、ダメ、あああっ！」

熱に浮かされたように顔を赤らめ、額に浮かぶ汗を振り払うように首を何度も振り、汗にまみれた髪を振り乱す。

開いた瞼の奥、瞳は既に焦点を失っている。目を閉じれば、目尻から涙がまた溢れ落ちてゆく。

半ば開いた口からは、「はあ、はあ、はあ」と荒い吐息が止めどなく洩れ、突き込まれると大きく口を開けて嬌声を喉から迸らせる。

渴いた桜色の唇はわななき、無意識に舌がその唇を舐めてぬめらせる。すると男の唇が遠慮なく押し当てられ、可憐な唇と舌、口腔を犯す。

耳や喉、うなじも至る所が赤く充血し、男の唇と舌が蹂躪した痕を色濃く残る。

「…もつと…さわって…して…やめちゃ…いや………ああっ！…あっ！は…こんつ、な…激し、くつ！突かれっ…あう、たら…あああっ！…やああんっ！」

白い肌を這いまわる男の舌が、腋や背筋、膝裏の汗を残さず舐め取り、代わりに唾液とキスマークを残してゆく。

美しく豊かに実った双乳は男の手と舌で隅々まで凌辱され、芯に硬さを残した若い胸はこの三年で弾力と柔らかさを備えた女の乳房となった。

この館で男の手と腰で散々に叩かれた尻肉は赤く腫れ、ひりつく痛みが彼女に痺れるような快感を呼び起こす。

太ももの内側には溢れた蜜と精液がこびり付き、男の動きに合わせて、モノを締め付けようと震えている。

「ああっ！だめ、だめえ！あああっ！ん、はあ、は…はげしっ…っあ！くあんっ！お、おねがい、イかせてえっ！あたし、もう…もう…」

キャロンが喘ぎ、悶え、軀を痙攣させるたび、唯一身に着けているチョーカーとガーターリングが赤く、鈍く、妖しく光る。

太ももを締め付けてむっちりとした肉を浮き上げさせている赤いガーターリングは彼女の足枷として、妖しく光る赤い宝石のついたチョーカーは彼女の首輪として、彼女の心を拘束し、身体の抵抗を奪い、性欲への従順を強要していた。

「あ、うっ！…あついの…中に、ちようだい…ああっ、はあっ！ああっ！あ、ああっ！うあ、んっ、く！はあんっ！は、ううっ！う…うあ、あっ、ああっ！は、あああっ！」

実は、この二つはラモー・ルーが作った魔道具として闇に伝わる品であり、身に着けた女を魔力で縛って抵抗する力を奪い、発情を促す力がある。

男は催眠術を完成させるにあたって、これらの魔道具を彼女自身に身に着けさせるべく、プレゼントしたのだ。

すると彼女は、疑うことなく喜んでガーターリングをつけ、いつも着けていた金のチョーカーを外し、赤いチョーカーをつけた。

赤は彼女のイメージカラーであるが、同時に宿敵ラモー・ルーの魔眼の色でもある。彼女はあつと言う間にその色に魅入られてしまった。



男は、あられもない姿でベッドに横たわるキャロンの姿を眺め、ほくそ笑んだ。彼の計画はこれから最終段階になる。この術がうまくいけば、彼女は二度と自分から離れることは出来なくなるだろう。彼女は男の性奴隷となり果てるのだ。

ククク、と喉を鳴らす男。その邪悪な笑みと、力を失ったキャロンの肉体、その肌へ手を伸ばす男の姿を、壁の大きな姿見が静かに映していた。